

## W.グンデルトの日本学 —キリスト教から神道、そして文学—

兼 岡 理 恵\*

### はじめに

#### (1)W・グンデルトについて

ドイツの日本学者ヴィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert 1880-1971) は、本シンポジウム「近代日本と北歐・ドイツ—文学・宗教・ナショナリズム」の副題に掲げられている「文学」「宗教」「ナショナリズム」、いずれの観点からも看過できない人物である。グンデルトは1880年西南ドイツ、ヴェルテンベルク州に生まれる。一家は代々敬虔なキリスト教徒で、「シュヴァーベン敬虔派」に属していた。祖父ヘルマン・グンデルトは、宣教師としてインドで布教活動を行い、のちに「カルフ出版協会」代表として、多くのキリスト教関連書を編纂した。作家ヘルマン・ヘッセは、ヘルマンの孫である（グンデルトとヘルマン・ヘッセは従兄弟同士）。宣教師となったグンデルトは、内村鑑三の『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』を読んで感動し、1904年父ダーフィットが経営するグンデルト書店より、同書のドイツ語訳を出版する。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』は、もともとアメリカ人読者を想定し、1895年に東京の出版社から『How I became a Christian』として出版されたが、その売り上げは芳しくなく絶版となっていた。しかしグンデルトのドイツ語訳は好評を博し、1906年には重版され、また1905年スウェーデン語訳・フィンランド語訳、1906年デンマーク語訳、1913年フランス

語訳など各国において翻訳が出版され、内村が広く世界に知られる契機となった<sup>1</sup>。一方、グンデルトは、この翻訳が縁となり、1906年に内村、東京YMCA等の助力を受け、自由宣教師として来日した。いわば内村にとってグンデルトは、内村を「世界」と繋げた人物だったのに対し、グンデルトにとって内村は、「日本」との縁を作った人物といえよう。

来日後のグンデルトは、新潟県村松市での伝道、旧制第一高等学校 (1906~1909)・第五高等学校 (1915~1920)・水戸高等学校 (1922~1927) などで教鞭をとりつつ、日本語と日本文化の研究に従事した。この間、1920年にはドイツへ帰国し、1921年10月よりハンブルク大学にてカール・フローレンツのもとで日本学を研究し<sup>2</sup>、1925年「日本の能楽における神道 (*Der Schintoismus im Japanischen Nō-Dorama*)」で博士号 (哲学) を取得する。1936年カール・フローレンツの後任として、ハンブルク大学日本学講座の正教授に就任し、その後、同大・総長、副総長も務める。その一方、1932年にはナチ党に入党し、同党のプロパガンダ的な講演・評論執筆などを行っている。戦後、1945年8月にはナチスへの協力により公職を離れるも、1946年ハンブルク大学退職主任教授扱いとなる。戦後も、日本はじめ東洋の思想・文学等の研究を続け、東洋詩のアンソロジーである『東洋の叙情詩 (*Lyrik des Ostens*)』(A・シンメル、W・シュープリングとの共編、1952年刊) や、『碧巖録』のドイツ語訳 (1巻1960年、2巻1967年、3巻1972年) などを行っている。

\*千葉大学・准教授

## (2)日本におけるグンデルト研究

グンデルトについては、渡辺好明による詳細な伝記研究をはじめ<sup>3</sup>、これまで諸氏によって様々な論じられてきたが、日本におけるグンデルト研究は、グンデルトの活動時期・内容によって、主に次の3つに分けられる。Ⅰ、1920年代：能楽研究について（新田 1967、片岡 1978、関根 1979など）、Ⅱ、1930～1940年代：グンデルトとナチス・ドイツとの関連、その活動等について（ヴォルム 1984、辻 2009、シャイト 2013・2020など）、Ⅲ、1950年代～晩年：戦後における『碧巖録』翻訳をはじめとする禅研究について（平田 1966など）。

近年のグンデルト研究はⅡ、すなわちグンデルトのナチ党時代の活動に関するものが主流であり、本シンポジウムのテーマ・副題でいえば「ナショナルリズム」的観点からの研究といえる。それに対し、Ⅰ（能楽研究）、Ⅲ（禅研究）については、「文学」「宗教」的観点を中心としたものだが、Ⅰ・Ⅲに関する先行研究は、主に1960～70年代—グンデルトの生前、あるいは亡くなった直後に発表されたものが多い。しかしⅡの「ナショナルリズム」的観点からグンデルトへアプローチを行う上でも、Ⅰ・Ⅲ、すなわち、自由宣教師として来日したグンデルトが、能楽のどのような点に関心を持ち、そもそも仏教的要素が強い能楽において、なぜ「神道」なるテーマを見出したのか、また彼の文学研究の特徴、さらに晩年、『碧巖録』翻訳をはじめとする禅研究へ向かっていった思想的背景などについて、改めて辿ることは重要だろう。

このような観点から本稿では、諸氏によるこれまでの研究に多くを負いながら、グンデルトの日本研究の出発点となった「日本の能における神道」やその能楽論、文学研究、禅に対する彼の姿勢などについて確認し、今後のグンデルト研究について考えていきたい。

## 1 日本研究、その出発点—能楽・文学研究

「日本の能楽における神道（*Der Schintoismus im Japanischen Nō-Dorama*）」は、グンデルトが水戸高等学校在任時に執筆したものである。同論文によりグンデルトは1925年1月ハンブルク大学より博士号（哲学）を授与され、同年『ドイツ東洋文化協会（OAG）報告』19に同論文が掲載されている。

本論は2部構成をとる。第1部では、神事にかかわる約50の謡曲を「伊勢」「京都およびその周辺」「大和・紀伊」「東海道・常陸」「大阪～九州」「能登～出雲」の6つの地域に分類し、各曲の概説およびドイツ語訳（一部）を行い、第2部では能楽全般に関する論として、謡曲における詞章・神名等から神道的表現を分析し、能楽における思想・宗教観を考察している。

第1部の掲載曲を、以下に示す（各曲のドイツ語訳の有無について、○：ほぼ全曲、△：一部、記号なし：翻訳無し、とした）。

### 【伊勢】

1 御裳濯△、2 絵馬○、3 第六天△

### 【京都およびその周辺】

4 賀茂○、5 水無月祓、6 賀茂物狂、7 右近、8 雷電、9 白鬚、10 志賀、11 松尾、12 弓八幡、13 放生川、14 金札、15 伏見、16 小鍛冶、17 氷室

### 【大和・紀伊】

18 春日龍神△、19 采女、20 逆矛△、21 竜田○、22 竜田物狂、23 鶏竜田、24 三輪○、25 葛城、26 代主、27 護法、28 巻絹

### 【東海道・常陸】

29 大蛇○、30 草薙○、31 源太夫、32 園田△、33 生贄、34 富士山、35 江島、36 常陸帯

【大阪～九州】

37 住吉詣、38 磐船、39 雨月、40 蟻通、41 鼓滝、  
42 淡路〇、43 室君△、44 和布刈△、45 玉井〇、  
46 鶉の羽△、47 老松

【能登～出雲】

48 鶉祭、49 久世戸、50 浦嶋、51 大社

このうち、たとえば【京都およびその周辺】に所収される「賀茂」(4)は、京都・賀茂社の霊験・縁起譚で、別雷神(上賀茂神社の祭神・後シテ)が、雷を起し五穀豊穡・国土守護を約すというものである。賀茂社の縁起は、奈良時代に編纂された『山城国風土記』に記載されているが<sup>4</sup>、グンデルトは同項目の記述にあたり、フローレンツ『日本文学史 (Geschichte der japanischen Litteratur)』(1906)における『山城国風土記』「賀茂社」条および「伊奈利社」条のドイツ語訳をふまえながら<sup>5</sup>、作品の背景について説明している。謡曲の詞章(テキスト)から、その特徴を考察するという方法は、まさに文学研究のそれであり、グンデルトがフローレンツに学んだ文献学的研究方法に拠っていることを示している。

また「日本の能楽における神道」発表の4年後、1929年に出版されたグンデルトの著作、『日本文学史 (Die japanische Literatur)』は、上代から1900年代初頭に至るまでの文学史を記述したもののだが、本文約130頁のうち14頁、全体の1割強が「能楽」に関する記述に充てられている。通常の文学史において、「能楽」にこれほど多くの紙幅が割かれることは例がなく、グンデルトの文学研究の中心が、能楽にあったことが、ここからも窺える。なお同書には「大社」の翻訳が掲載されている。同曲は「日本の能楽における神道」では翻訳がなかったため、本書執筆時に載せたものだろう。

さらに戦後、1952年に刊行された『東洋の抒情詩 (Lyrik des Ostens)』は、近東・インド・中国・日本の四部で構成された東洋詩のアンソロジーで

ある。このうちグンデルトは日本および中国の部の多くを担当している。日本の部は、上代の記紀歌謡から、明治期の正岡子規の俳句まで収載されているが、グンデルトはこのうち、主に上代～中世の作品を中心に担当、中には「いろは歌」も掲載されており、仏教の無常観が示されているともいわれる同歌の掲載は興味深い。さて、これらの中で謡曲は1曲、「芭蕉」(金春禅竹・作)が収められている。同曲について、グンデルトは1933年「金春禅竹の能“芭蕉”の独訳」(『ドイツ東洋文化研究協会報告創立六〇周年記念号』)にて発表しており、その成果をふまえたものだろう<sup>6</sup>。『東洋の抒情詩』は、グンデルトとハンザ一書店の社主・ヘルベルト・G・ゲッペルが、〈西洋の抒情詩〉と対を為すものとして1948年に企画したもので、同書が完成し手許に届いた日、グンデルトは日記に「1つの荘重な瞬間であった。神の存在に称賛と感謝を！」と書いたという<sup>7</sup>。同書の編纂時期は、戦後、グンデルトがハンブルク大学を退職し、研究を中心とした生活を送り始めた頃と重なる。同書の分析は、グンデルトの文学研究・思想などを考える上でも重要であるが<sup>8</sup>、本稿ではその指摘に留め、次にグンデルトの能楽観や、その研究方法について見ていきたい。

## 2 グンデルトの能楽観

「日本の能楽における神道」第2部に述べられている能楽観に関して、グンデルトは、1926年4月23日に明治聖徳記念学会第126回例会における講演「日本の能楽について思うこと (Gedanken über das japanische No-Drama)」で、その能楽研究の意図や研究方法などについて語っている。同講演については、1926年6月『謡曲界』に山崎楽堂が「グンデルト教授の能楽観」として紹介し、1927年には『明治聖徳昭和記念論集』27・28号に、講演内容がドイツ語で掲載されている(講演自体は日本語で行われた)。同論文については、関根(1979)

が、ほぼその全容を日本語訳した上で内容等について考察しており、以下、関根（1979）に拠りながら、グンドルトの能楽研究の方法や能楽観について確認していく。

#### 【問題意識】

まず能の本質（Wesen）とは何かという問いについて、グンドルトは、芸術性と宗教性が一体化したもので、中世ヨーロッパの聖史劇や受難劇と同質であると説く。その上で「能の宗教とは何か」という問いを提示する。

#### 【研究方法】

グンドルトは、能楽を研究する方法として、能楽作者たちの資料分析によって探究しようとした。しかし、そもそも能作品は作者不明であることが多く、かつ資料もほとんどない。そこで行ったのが、謡曲テキストの分析という方法であった。そこには能の本質・特性のみならず、日本人の宗教心一般（japanische Religiosität überhaupt）、その本質・特性も照射されていると考えたからである。

#### 【謡曲の宗教的要素の分析】

謡曲には「現象界の儂さ」などの仏教的要素が圧倒的に多いが、グンドルトはまず、神道的要素から分析することにした。なぜなら能楽は、神社における猿楽から派生したと言われるからである。そして神道の能楽には、能楽の中でも古い作品があるのではないかと考え、神道的な内容をもつ作品を分析した。その多くは神社で演じられるものである。また仏教と神道の相違点として、特定の「場」との関連性の有無があると考えた。すなわち、仏教的な精神（Geist）は、一つの場所、寺には結びつかない、精神的な世界観である。それに対して神道は、特定の社に結びつくもので、謡曲で“当社の御神秘（toshu no go-jimpi）”という言葉で示されるものがそれだとする。

#### 【能楽における本質】

そしてドイツの神学者・ルドルフ・オットー（Rudolf Otto, 1869-1937）が、その著作『聖なるもの（*Das Heilige*）』（1917）で論じた、宗教の本質

（Wesen）として、何らかの聖なるもの、神的なるもの（*etwas Heiligem, Göttlichem*）、すなわち“Numinose（ヌミノーズ）”〔ラテン語：numinosによるオットーの造語〕が、能楽における「shimmei（神明）」、「神さびわたる」に通じると説く。そして能楽におけるヌミノーズ的要素として、上演時における清祓（Weihe）の精神や、神に対する敬語などを指摘するとともに、能楽の中心が「舞」—神の顕現をあらわす「神舞」にあるとし、そこに「デュオニッソスの芸術」「原宗教的聖餐（*urreligiöses Sakrament*）」があるとする。

以上、見てきたようなグンドルトの能楽観—「秘義なるもの」に価値を見出すという点は、グンドルトが属していた「シュヴァーベン敬虔派」の特徴である、個人の神秘的な覚醒体験を求める点、さらに禅における「悟り」にも通じるものだろう<sup>9</sup>。

そこで次に、禅研究に関するグンドルトの言説を確認する。

### 3 グンドルトの禅研究

ここで取り上げるのは、晩年のグンドルトが、自身の禅研究や、そこに至る背景などについて述べた『『碧巖録』独訳余話』（訳：上田閑照）という文章である。その中でグンドルトは『碧巖録』翻訳などについて、次のように述べている<sup>10</sup>。

『碧巖録』の内的理解へと私を導いてくれたものは結局のところ、実は仏教的なものではなく、私自身の由来に含まれている精神的遺産即ちキリスト教から来たものであった。

（中略）

しかし年月の経過、何十年の人生のうちで私のキリスト教的確信は様々に変わった。確信が崩れ去ったように思われた時期も多かった。多くの点で伝統的なドグマから離れざるを得なかったが、それは、以前の立場からすると、

殆ど信仰からの脱落のようにも見えた。しかしながらこのような回り道は、結局のところ私を聖書の語る神の不可測なる秘義を新しい光のもとに見得るようなところに導いてくれた。そして実は、この光が私にまた仏教、殊に禪の不可測なる秘義に対する眼を拓いてくれたのである。禪とキリスト教の間には、いくつかの点においてリアルな一致がある。『碧巖録』翻訳を私が或る程度までなし得たのは、全くその一致のおかげである。

ここでグンデルトが述べる「神の不可測なる秘義」「禪の不可測なる秘義」、すなわち「禪とキリスト教の間にあるいくつかのリアルな一致」という点は、先述した「宗教の本質 (Wesen)」である「何らか聖なるもの、神的なるもの (etwas Heiligem, Göttlichem) = “Numinose (ヌミノーズ)” (能楽における「shimmei (神明)」「神さびわたる」という言)と通じるものである。ここには、グンデルトの日本研究の端緒—能楽研究から、晩年の禪研究にいたるまで、その根底に一貫して、キリスト教的観点からの関心、理解があることが示されている。

またグンデルトが、禪における「無住の住」について述べた言として、平田高士は以下のような発言を伝えている<sup>11</sup>。

禪に言う無住に住するという言葉は素晴らしい言葉です。従来のキリスト教神学は何か一定のところに住着していたのではないか、キリスト教といえども個人の信仰体験から教義や神学が生まれるのですから、やはり無住に住するのではなければならぬはずです。

「無住の住」とは、『金剛経』における「応無所住而生其心 (応に住する所無こうしてその心を生じず)」、何物にもとらわれないこと、執着を捨てた自由の境界にあることを言う。また「個人の信仰体験から教義や神学が生まれる」という言は、

先述した「シュヴァーベン敬虔派」の特徴、すなわち個人の神秘的敬虔を重視する姿勢をふまえたものだろう。さらにグンデルトの言は、次のように続く。

「私は禪の本を翻訳しその心理を探ろうとはしていますが、決して禪の信者になるうなどとは思っていません。私はあくまでキリスト教徒です」

グンデルトは、あくまでキリスト教、宣教師としての視点から禪の教義を考えている。またそれは見方を変えれば、日本の能楽や宗教、禪などから、キリスト教について捉え直したとも言えよう。

## おわりに

以上、グンデルトの能楽・文学・禪研究などについて、先行研究に基づいて概観してきた。グンデルトの研究については、「はじめに」で述べたように、近年では戦中におけるナチ党への関与から考察するものが中心であり、批判的なものも少なくない。たとえば1935年に出版されたグンデルトの著作『日本宗教史 (*Japanische Religionsgeschichte*)』は、戦前～戦中の日本における皇国史観的な記述のため、戦後、強い批判を受けたとされる<sup>12</sup>。また、グンデルトを含めたドイツの日本学者の神道研究について、戦前～戦中は国粹主義的なナチのプロパガンダ的要素が強く、それゆえ戦後はタブー視されるようになった結果、彼らは禪仏教研究に向かったが、禪仏教研究は戦前～戦中の政治色を完全に払拭できただけでなく、ナチス時代に形成された観念や研究を維持することができたという指摘もある<sup>13</sup>。いわば戦前・戦中の神道研究の「隠れ蓑」としての禪仏教研究という見方である。しかしこうしたドイツ日本学者たちの禪仏教研究への向き合い方は、それぞれに検討する必要があり、グンデルトについては、先に見たようにその根底

に、彼の日本研究の出発点から晩年に至るまで、宣教師—キリスト教的視点があったことを、常に考える必要がある。

グンデルトに関する研究は、19世紀末から20世紀後半のドイツにおける日本へのまなざしや、キリスト教、神道、仏教などに対する思想を浮かび上がらせるものとも言えよう。本稿は、その可能性を示したに過ぎない。グンデルトの文学研究を中心に検討することを、今後の課題としたい。

#### 注

- 1 渡辺 (2017)、35頁
- 2 ドイツの日本学者、カール・フローレンツ (Karl Florenz 1865-1939) は、1889年来日し、東京帝国大学でドイツ語・ドイツ文学・比較言語学を講じ、『日本書紀』をはじめ日本の詩歌集・戯曲を翻訳、帰国後はハンブルク植民学院 (ハンブルク大学の前身)・日本学講座の初代教授となる。著作に『日本の神話 (Japanische Mythologie)』(1901)、『日本文学史 (Geschichte der japanischen Litteratur)』(1906) など。フローレンツについては、佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』(春秋社 1995) に詳しい。
- 3 『ヴィルヘルム・グンデルト伝』(私家版 2017)
- 4 『山城国風土記』は、奈良時代に編纂された風土記の一つであるが、現在まとまった形では残っておらず、逸文として『釈日本紀』(14世紀初頭に編纂された『日本書紀』注釈書) などによって確認できる。「賀茂社」条も、『釈日本紀』に記載されている。なおフローレンツの風土記受容については、拙稿「19世紀末における風土記享受—カール・フローレンツを中心に」(『国語と国文学』96 (11) 2019・11) にて論じた。
- 5 フローレンツの同訳については、拙稿「『山城国風土記逸文・伊奈利社条のドイツ語訳』(『朱』63 2020・3) にてその概要を紹介した。
- 6 渡辺 (2017)、250頁
- 7 渡辺 (2017)、309-311頁
- 8 なお、同書や掲掲『日本文学史』におけるグンデルトの俳句の翻訳・俳句観などについて考察した論として、宮坂豊夫「俳句はドイツへどのように紹介されたか」(『人文論究』52 (1)、2002・5)、宮内伸子「俳句のドイツ語訳の変遷について」(『富山大学人文学部紀要』71、2019・8) がある。
- 9 シャイト (2020)

- 10 (『講座 禅』第8巻、筑摩書房 1974) 307-308頁
- 11 平田 高士「世界の中の禅 ドイツ」(『講座 禅』第8巻、筑摩書房初版1968、新装版1974) 282頁
- 12 平藤 (2016)
- 13 シャイト (2020)

#### ◇主要参考文献

- ・片岡美智「<能>への二つのアプローチ—N.ペリーとW.グンデルトの対照的な「三輪」観」(『京都外国語大学研究論叢』18、1978・3)
- ・佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』(春秋社 1995)
- ・関根 俊雄「グンデルトの能楽本質論」(『跡見学園短期大学紀要』15、1979・3)
- ・辻朋季「カール・フローレンツの日本研究とその系譜—異文化賞賛に潜む支配の構図」(『ドイツ研究』43、2009・3)
- ・中丸禎子「無教会の北欧受容 香川鉄蔵、イシガオサムのラーゲルレヴ受容を中心に」(『北ヨーロッパ研究』17、2021・7)
- ・新田義之「ヴィルヘルム・グンデルトの謡曲研究」(『外国文学研究紀要』15 (2)、1967・7)
- ・新田義之「グンデルト一家とその周辺」(『外国語科研究紀要』37 (1)、1990・3)
- ・平田高士「碧巖録三十五則に於けるグンデルト教授の疑義に就いて」(『印度学仏教学研究』14 (2)、1966・3)
- ・平田高士「世界の中の禅 ドイツ」(『講座 禅』第8巻、筑摩書房 初版1968、新装版1974)
- ・平藤喜久子「海外における日本神話研究—ファシズム期の視点から—」(國學院大學研究開発推進センター編『昭和前期の神道と社会』弘文堂 2016)
- ・フラッヘ・ウルズラ (訳：杉原 早紀)「ドイツ語圏の日本研究から見た神仏分離」(『国立歴史民俗博物館研究報告』148、2008・12)
- ・フラッヘ・ウルズラ (訳：江口 大輔)「ドイツ語圏の日本学における神社に関する研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』148、2008・12)
- ・ヘルベルト・ヴォルム「ナチス時代の日本学研究」(『ベルリン日独センター報告集』1、1989・8)
- ・ベルンハルト・シャイト「二十世紀のドイツ語圏における神道研究」(『神道・日本文化研究国際シンポジウム (第一回) 各国における神道研究の現状と課題』國學院大學21世紀COEプログラム、2003・9)
- ・ベルンハルト・シャイト「ナチス時代の日本学における「神道」と「禅」：W.グンデルトとその周辺」(平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』北海道大学出版会 2020)

- ・宮内伸子「俳句のドイツ語訳の変遷について」（『富山大学人文学部紀要』71、2019・8）
- ・渡辺好明『ヴィルヘルム・グンデルト伝』（私家版2017）
- ・W・グンデルト「欧洲最近の宗教思想」（『密教研究』23、1926・12）
- ・W・グンデルト『『碧巖録』独訳余話（訳：上田閑照）』（『講座 禅』第8巻，筑摩書房 初版1968、新装版1974）

※本研究は、JSPS科研費JP19K00317、JP 19K00532の助成を受けたものである